「春琴抄」

原作／谷崎潤一郎　　脚本・演出／菊池敏弘

語り　青山伊津美

佐助　佐野陽一

春琴　森下ひさえ

鳴沢てる・母しげ・女中・その他　松井みどり

寺男・安左衛門・利太郎・その他　青木祐也

※田中象雨さんによる書のパフォーマンス

一場

向かって右側に春琴、左側に佐助。共に眼を閉じて静かに座っている。

三人　春琴、本当の名は鵙屋琴、大阪道修町（どしょうまち）の薬種商の生まれで、没年は明治十九年十月十四日、墓は市内下寺町の浄土宗の何某（なにがし）の寺にある。

語り　先だって、通りがかりにお墓参りをする気になり、立ち寄って案内を乞うと

寺男　鵙屋さんのお墓はこちらでございます

語り　と、寺男に本堂の後ろのほうへと連れて行かれた。見るとひと叢（むら）の椿（つばき）の木かげに鵙屋家代々の墓が数基ならんでいるのであったが、琴女の墓らしいものは見あたらなかった。

昔、鵙屋家の娘にしかじかの人があった筈ですが、その人のはというと

寺男　ああ、それならあれにありますのがそうかもしれませぬ

語り　と東側の急な坂路になっている段々の上へ連れて行かれた。

光誉春琴恵照禅定尼（こうよしゅんきんえしょうぜんじょうに）、俗名鵙屋琴、号春琴、明治十九年十月十四日没、行年五十八歳

春琴　わてのほんまの天分はな、舞にあったんや。わての琴や三味を褒めるんは、わてというもんを知らんからや。目さえ見えたら決して音曲（おんぎょく）のほうへはいかなんだ。

寺男　鵙屋さんの家はとうに没落してしまい、近頃では、稀に一族の方がお参りに来るだけで、しかもこの墓を訪れることはほとんどないので、これが鵙屋さんの

身内のお方のものであろうとは思いませんでした。

語り　するとこの仏さまは無縁になっているのですか

寺男　いえ無縁という訳ではありませぬ。萩の茶屋の方に住んでおられる老婦人が年に一二度お参りに来られます。

（鳴沢てる登場）

そのお方はこのお墓へお参りをされて、それから、それ、ここに小さなお墓があるでしょう。このお墓へも香華（こうげ）を手向（たむ）けて行かれます。お経料などもそのお

方がお上げになります。

語り　寺男が示した小さな墓標の前へ行ってみると石の大きさは琴女の墓の半分くらいである。

真誉琴台正道信士（しんよきんだいしょうどうしんし）、俗名温井佐助、号琴台、鵙屋春琴門人、明治四十年十月十四日没、行年八十三歳

佐助　わしはお師匠様のお顔を見て、お気の毒とかおかわいそうとか思ったことは一

遍もないぞ。お師匠様に比べたら、目明きの方がみじめだぞ。お師匠様があのご気性とご器量でなんで人の憐れみを求められよう。佐助どんは可愛そうじゃと、かえってわしを憐れんで下すったものじゃ。

語り

私は、折から夕日が墓石の表に赤々と照っているその丘の上にたたずんで、足もとに広がる大大阪市の景観を眺めた。奇しき因縁にまとわれた二人の師弟は、夕もやの底に大ビルディングが数しれず立ち並ぶ東洋一の工業都市を見下ろしながら、永久にここに眠っているのである。

遠くに、車のクラクションの音や、町の雑踏の音　　ゆっくり暗転

二場

語り　近頃私の手に入れたものに「鵙屋春琴伝」という小冊子があり、これが私の春琴女を知るに至ったきっかけであるが、この書は春琴女の三回忌に弟子の佐助が誰かに頼んで師の伝記を編ませ配りものにでもしたのであろう。佐助のことも三人称で書いてあるけれども、本当の著者は佐助その人であるとみて差し支えあるまい。

伝によると、鵙屋家は、代々大阪道修町（どしょうまち）にて薬問屋を営み、春琴の父安左衛門は、その七代目であった。母しげ女は京都の出で、二男四女をもうけ、春琴は

その第二女であった。

「春琴幼にして穎悟（えいご）、加ふるに容姿端麗にして高雅なること譬（たと）えんに物なし。四歳の頃より舞を習ひけるに挙措進退（きょそしんたい）の法自ずから備はりて、さす手ひく手の優艶なること舞妓も及ばぬ程なりければ、師もしばしば舌を巻きて、あわれこの子、この材と質とを以ってせば、天下に嬌名（きょうめい）を謳われんこと期して待つべきに、良家の子女に生まれたるは幸とや云わん、不幸とや云わんと呟きしとかや。又早くより読み書きの道を学ぶに上達すこぶる速やかにして二人の兄をさへ凌駕したりき」

これらの記事が春琴を神のごとく見ていた佐助からでたものであるとすれば、どれほど信用してよいか分からないけれども、彼女が幼い頃から非常に利発で美しく、舞の才能も豊かであったことは間違いないようである。

「されば両親も琴女を視ること掌中の珠の如く、五人の兄弟達に超えてひとりこの子を寵愛しけるに、琴女九歳の時、不幸にして眼疾を得、幾ばくもなくして遂に全く両眼の明を失いければ、父母の悲嘆大方ならず、母は我が児の不憫さに天を恨み人を憎みて一時狂せるが如くなりき。春琴これより舞技を断念して専ら琴三絃の稽古を励み、糸竹（しちく）の道を志すにいたりぬ。」

てる　お師匠さまは舞がお上手(じょうず)だったそうにございますが琴や三味線も五つ六つの時分から春松という検校さんに手ほどきをしておもらいなされ、それからずっと稽古を励んでおられました。

語り　先程の萩の茶屋に住んでいる老婦人というのは鴫沢(しぎさわ)てるといい生田(いくた)流の勾当(こうとう)で晩年の春琴と佐助に親しく仕えた人である。

てる　お師匠さまは十の歳にあのむずかしい「残月」の曲を聞き覚えて独りで三味線にお取りなされたと申します。なかなか凡人には真似られぬことでございます。

また、お師匠さまがいつも自慢をされましたのに、春松検校は随分稽古が厳しいお方だったけれど、自分は身に沁みて叱られたということがなかった。褒められたことの方が多かった、ということでございます。修行の苦しみを知らずにあれまでにおなりなされたのですから、やはり天品だったのでございましょう。ただ盲目になられてからは、ほかに楽しみがございませぬので一層深くこの道へお這入りなされ、精魂を打ち込まれたのかとぞんじます。

語り

春琴の眼疾、目の病気というのは何であったか明らかではないが、ここでは敢えて原因を問わず、ただ九歳の時に盲目になったということに留めておこう。

そして、これより舞を断念して専ら琴三弦の稽古を励み、糸竹の道を志したのである。

（春琴登場）

春琴　佐助、佐助、誰かはよう佐助連れてきて。・・・三十日（みそか）？それがどないしてん。人手が足らん言いたいんか・・・それならええ、今日はわて一人で行くさかい。なに？無茶言うてんのはそっちやろ。店にはあれだけぎょうさん人がおるいうのに、佐助ひとり連れてこられへん言うお前のほうが、よっぽど無茶苦茶やないか。・・・なんやて、ほなら他のもん連れて来て。佐助よりおとなしゅうて

邪魔にならんもんがおるんやったら、はよ連れて来て！

（佐助登場）

佐助　すんません。遅うなりました。

春琴　遅いなあ。何してたんや。今日は稽古の日やろ。忘れてたんか。はようせんと稽古に遅れるやないか。何をもたもたしてたんや。

佐助　すんません。ちょっと番頭さんに呼ばれておりましたもんで。

春琴　言い訳はいらん。はよう行くで。

佐助　へい。

語り　春琴が右の掌（てのひら）を差し出す。佐助は左の掌を上に向け、春琴の肩の高さに捧げる。そして彼女の右の掌を受ける。春琴は佐助に手を引かれて稽古に通った。二人の縁はかくして生じたのである。

春琴には佐助というものが一つの掌に過ぎないようであった。たまたま用をさせる時にもしぐさで示したり顔をしかめてみせたり謎（なぞ）をかけるようにひとりごとを洩（も）らしたりして、片時も佐助に油断する暇（いとま）を与えなかった。

あるとき、稽古の順番が回ってくるのを待っている間にふと春琴の姿が見えなくなったので、佐助が驚いてその辺りを探すと、知らぬ間に厠に行っているのであった。いつも小用に立つときには黙って春琴が出て行くのをそれと察して追いかけながら戸口まで手を曳いて連れて行き、そこに待っていて手水の水をかけてやるのに、今日は佐助がうっかりしていたのでそのまま独り手探りで行ったのである。

佐助　済まんことでござりました。

語り　佐助は声を震わせながら、厠から出て手水鉢の柄杓を取ろうと手を伸ばしている少女の前に駆けて来て言ったが、春琴は

春琴　もうええ

語り　と言いつつ首を振った。こういう場合「もうええ」と言われて

佐助　そうでござりますか

語り　と引き下がっては一層後がいけないのである（焦る佐助）。無理にも柄杓をもぎ取るようにして水をかけてやるのがコツなのである（慌てて柄杓をもぎ取って水をかけてやる）。

またある夏の日の午後に順番を待っているとき、うしろに控えていると

春琴　暑い

語り　と独り言をもらした。

佐助　暑うございますなあ。

語り　と、おあいそを言ってみたが何の返事もせず、しばらくするとまた

春琴　暑い

語り　という。

（佐助に）暑い言うてますよ。

心づいて有り合わせた団扇を取り、背中のほうからあおいでやると、それで納

得したようであったが、少しでもあおぎ方が気が抜けるとすぐ、暑いを繰り返した。

春琴、「暑い」を連発。佐助、両手に団扇を持ってであおぐ。さらに特大の団扇を持って必死であおぐ。ひたすらあおぐ。あおぐ、あおぎまくる。

春琴　（くしゃみ一発）寒いわ、アホ！

佐助、驚いて目を丸くするが、その後、ゆっくりと満足したような眼差しを

春琴に向ける。

語り

春琴の強情と気儘（きまま）とはかくのごとくであったけれども、佐助もまたそれを苦役と感ぜずむしろ喜んだのであった。彼女の特別な意地悪さを甘（あま）えられているように取り、一種の恩寵（おんちょう）のごとくに解したのでもあろう。

三場

三味線を弾く春琴。熱心に耳を傾ける佐助

語り

佐助は番が廻って来ると春琴を検校とさし向いの席に直らせ、いったん控え室へ下って油断なく耳を立て、済んだら呼ばれないうちに直ちに立って行くようにした。されば春琴の習っている音曲が自然と耳につくのも道理である。佐助の音楽趣味はかくして養われたのであった。

舞台中央スポットの中で三味線を弾く佐助。

語り　佐助はただ春琴に忠実であるあまり、彼女の好むところのものを己も好むようになり、ようよう粗末な稽古三味線を買い求めると、夜な夜な朋輩の寝静まるのを待って、ひとり、稽古をした。もちろん爪弾きで撥は使えなかった。真っ暗な押入れの中で手さぐりで弾くのである。が、佐助はその暗闇を少しも不便に感じなかった。

佐助　盲人の人は常にこういう闇の中にいる。こいさんもまたこの闇の中で三味線を

お弾きなさるのだ。

春琴（の影）、佐助にうしろから重なる。佐助の両手首を掴んでぐいと引っ張る。佐助、十字架に貼り付けられたような格好から、今度はまるで二人羽織のように、弾いてる腕だけは春琴。陶酔する佐助。

語り（番頭として）　佐助、佐助・・・佐助！何をしとるんや！

春琴（の影）は消え、暗転

佐助　す、すんません。

語り　佐助はずっと押入の中でしていればよかったのだが、誰も気が付きそうにないので、夜な夜なそっと物干台に出て弾いていた。番頭が聞いたのはそれであった。

佐助　ほんまにすまんことでござりました。

語り　一番番頭の前に呼びつけられ大眼玉を喰った上に、以後は断じて罷(まか)りならぬと三味線を没収されたことは当然のなりゆきを見た訳であるが、この時意外なところから、佐助に救いの手が伸ばされた。とにかくどのくらい弾けるものか聴いてみたいという意見が奥から持ち出されたのである。しかもその首唱者は春琴であった。

春琴　佐助、お前、夜中に三味線の稽古をしとるそうやないか。

佐助　へい・・・あの・・・すんません・・・

春琴　三味線はどないして手に入れたんや。

佐助　へい、あの・・・時々のお手当や、使い先でいただく小遣いを貯めまして・・・。

春琴　自分で買うたんか。

佐助　へい。

春琴　なんでまた三味線なんか弾こう思うたんや。

佐助　それは・・・。

春琴　まあええ。それで、どれくらい弾けるようになったんや。わてに聞かせてみ。

佐助　滅相もない。とてもこいさんに聞いていただくようなものやござりまへん。

春琴　聞くか聞かんか決めるんはおまえやない。わてが決めることや。それともなにか、お月さんの下では弾けても、わての前では、もったいなくてよう弾かれへ

ん言うのんか。

佐助　堪忍しておくれやす。堪忍しておくれやす。

春琴　ええから、はよう弾いてみ。いくつかできるんやろ。知ってるだけみなやってみ。はよう、はよう。弾くまで、わて許さへんで。

佐助　・・・

春琴　弾いてみ！

語り　当時佐助は五つ六つの曲をどうやらこなすまでに仕上げていたので度胸を据えて精限り根限り弾いた。鵙屋の家族は短時日のひとり稽古にしては勘どころ

も確かなら節廻しも出来ていることが分って、聴いた後には皆感心した。

春琴　佐助、お前いつから三味線弾くようになってん。

佐助　半年ほど前から・・・。

春琴　ふ～ん。さっき姉さんは、ひとり稽古にしては、よう弾く言うて褒めとったけど、わてはそうは思わん。わてやったら半年もあればもっとマシになってるわ。

佐助　へい・・・

春琴　やっぱ・・・だれか教えてやらなあかんな・・・。

佐助　え？

春琴　お前がどうしても言うのやったら、教えてやらんでもないが・・・。

佐助　ほんまでっか。

春琴　そのかわり、稽古のときはわてのこと、お師匠様と呼ぶのやで。ええか。

佐助　へい。ありがとうございます。

四場

語り

「時に春琴は佐助が志を憐れみ、汝の熱心にめでて以後は、わらわが教えて取らせん。汝余暇あらば、常にわらわを師と頼みて稽古を励むべしと言い、春琴の父安左衛門も遂に之を許しければ、佐助は天にも昇る心地して丁稚の業務に服する傍ら、日々一定の時間を限り指南を仰ぐこととはなりぬ。かくて主従の上に今又師弟の契りを結びたるぞ目出度き」

何にしても彼女が佐助を弟子に持とうと言い出してくれたのは親兄弟や奉公

人どもにとってありがたいことだった。皆、彼女のわがままに手を焼いていたところでもあったので、学校ごっこのようで、ちょうど都合がよかったのである。ただ、思惑と違ったことは、二人は次第に遊戯の域を脱して真剣になり、遂には毎日欠かさず教えるようになり、どうかすると九時十時に至っても尚許さず

春琴　違う違う。佐助、わてそんなこと教せたか。やあチリチリガン、チリチリガン、チリガンチリガンチリガーチッテンや。もう一遍やってみ。

佐助　へい、すんません。チリチリガン、チリチリガン、チリガンチリガンチリチリ

チリ・・・

春琴　ほら、また違うた。チリガーチッテンや。なんでこれくらいのことが覚えられへんのや、おまえは。

佐助　すんません。

春琴　もう一遍！

佐助　へい。チリチリガン、チリチリガン、チリガンチリガンチリガーチリガン

春琴　違う！もう一遍！

佐助　へい。チリチリガン、チリチリガン、チリガンチリガンチリチリガンガン

春琴　・・・おまえ、わざと間違うてるやろ。

佐助　そんな・・・

春琴　わてをなぶる気やな。

佐助　そんな、滅相な。

春琴　・・・

佐助　チリチリガン、チリチリガン、チリガンチリ・・・（半べそかきながら）チリチリガン、チリチリガン、チリガンチリガンチリチリガンチリ・・・お師匠様、お願いでございます。もう一度教えてくださりませ。お願い申します。

春琴　・・・

佐助　お師匠様・・・

春琴　やあチリチリガン、チリチリガン、チリガンチリガンチリガーチッテン、トッツントッツンルン、やあルルトン。やってみ。

佐助　へい・・・チリチリガン、チリチリガン、チリガンチリガンチリガーチリチリ

春琴　何遍間違うたら気が済むんや、このアホ！（と、佐助を殴る）

語り　摂津大（せっつだい）じょう亡き後の名人三代目越路太夫の眉間には大きな傷跡が三日月型に残っていた。それは師匠豊沢団七から「いつになったら覚えるのか」と撥で突き倒された記念であるという。春琴の師匠春松検校の教授法もつとに厳格を以って聞こえていた。ややもすれば駑馬（どば）が飛び手が伸びた。後日春琴が看板を

掲げ弟子を取るようになってから稽古振りの峻烈をもって鳴らしたのも、やはり師匠の方法を踏襲したのであり、由来するところがあるわけなのだが、それは佐助を教えた時代からすでにきざしていたのである。

春琴　覚えられるまで、夜通しかかったかてやりや。

佐助　すんません、すんません・・・（泣き出す）

春琴　お前は何ちゅう意気地なしなんや。男のくせにこれくらいのことで。さも仰山らしく聞こえるやないか。

語り　最初、遊戯をあてがった積りの大人たちも、ここに至ってすこぶる当惑(とうわく)した。琴や三味線の音、春琴の叱り飛ばす声に加え、佐助の泣く声が夜の更(ふ)けるまで耳についたりするのである。女中の誰彼(だれかれ)が見るに見かねて稽古の現場へ割って這入(はい)り

女中　まあなんという事でんの。姫御前のあられもない。男の子にえらい事しやはりまんねんなあ。

春琴　あんたら知ったこっちゃない。ほっといて。わてほんまに教せてやってるねんで。遊びごっちゃないねん。佐助のことを思やこそ一生懸命になってるねん。

どれくらい怒ったかていじめたかて、稽古は稽古やないかいな。あんたら知らんのか。

五場

語り

鵙屋の夫婦も、このままでは将来どんなに根性のひねくれた女が出来るかも知れぬ、困ったものだと案じていたが、そんな折、あるひとつの、まことに不思議な事件が起こった。春琴の体にただならぬ様子が見えることを母親が感づい

たのである。

しげ　なあお琴、あんたもしかして、お腹にやや子ができたんと違うか。

春琴　なにをおっしゃります。そんな覚えはさらさらございません。

語り　深くも追及しかねるので腑(ふ)に落ちないながら一箇月(いっかげつ)ほど捨てておくうちに、もはや事実を隠(かく)せぬまでになった。今度は春琴は素直に妊娠をみとめたが、いかに聞かれても相手を言わない。

春琴　お互いに名を言わぬ約束をしましたよって。

しげ　もしかして、佐助か？

春琴　佐助？（**鼻で笑って**）なんであのような丁稚風情に。

語り　ならば佐助に聞けば様子が知れようと、父、安左衛門は佐助を呼んで問いただした。

安左衛門　なあ佐助、お前、お琴に嬰児（ややこ）ができたことは知っとるな。

佐助　え・・・いえ、気が付きまへんでした・・・。

安左衛門　あの子のお腹の中にはな、嬰児（ややこ）がおるんや。お前、相手が誰か、知っとるのと違うか。

佐助　いえ・・・わて、なんも知りまへん。

しげ　お前は朝起きてから夜寝るまで、ずっとお琴と一緒や。お前が知らんで、誰が知っとる言うのや。それとも・・・相手はお前か？

佐助　なにを滅相な。自分の身に覚えのないのはもちろん、誰といって心当たりもございません。本当でございます。信じてくださりませ。

語り　けれども佐助の態度がオドオドして胡散臭（うさんくさ）いのに不審が加わり問い詰めて行

くと辻褄の合わないことが出て来た。

しげ　こいさんを庇(かば)うのはよいが主人の云い付けをなぜ聴かぬ。隠し立てをしてはかえってこいさんのためになりませぬ。ぜひ相手の名を云ってごらん。

佐助　堪忍しておくれやす。わて、ほんまに何も知らんのです・・・

安左衛門　なあ、佐助。怒らへん。決して怒らへんさかい、ほんまのことを言うてくれ。な、この通りや、頼む。

佐助　・・・それを申しましては・・・こいさんに叱られますよって・・・。

語り

決して白状しませぬと約束でもさせられたのであろうか、はっきりとは言わないのだが、しかし相手が自分であることを察してもらいたそうにも言うのである。鵙屋夫婦は、出来てしまったことは仕方がないし、まあまあ佐助だったのはよかった。ならば早く一緒にさせるほうがと春琴に持ちかけてみると、

春琴

そんな話はいやでござります。自分は一生夫を持つ気はございません。殊に佐助などとは思いもよりませぬ。私の身を不憫がって下さいますのはかたじけのうござりますが、いかに不自由な体なればとて、奉公人を婿に持とうとまでは思いませぬ。お腹の子の父親に対しても済まぬことでござります。

安左衛門　ならば、そのお腹の子の父親は誰なんや。

春琴　　そればかりは尋ねないで下さりませ、どうでその人に添うつもりはござりませんよって。

語り　　その後春琴が産んだ子は佐助に瓜二つ。なのにこの期に及んでも佐助が父親であることは認めない。仕方なく二人を対決させてみると

春琴　　佐助どん、何ぞ疑られるようなこと言うたんと違うか。わてが迷惑するよって、身に覚えのないことはないとはっきり明りを立ててほしい。

佐助　お師匠様であるこいさんを、滅相なことでございます、子飼いの時より一方ならぬ大恩を受けながら、そのような不料簡は起こしませぬ。思いも寄らぬ濡れ衣でございます。

安左衛門　生まれた子が可愛くはないか。そなたがそんなに強情を張るなら、父(てて)なし児を育てる訳には行かぬ。断って縁組がいやだとあれば、可愛そうでも嬰児(ややこ)は何処ぞへくれてやるより仕方がないが・・・。

春琴　どうぞ何処へなと、おやりなされてくださりませ。一生独り身で暮らす私に、足手まといでございます。

語り　結局、春琴が生んだ子は、どこぞへもらわれていったのである。

手曳きして歩く春琴と佐助。ゆっくり、堂々と。

六場

語り　主従か師弟か恋仲か。もはや公然の秘密になっている二人を、いつまでも曖昧な状態にしておいては世間の目というものもある。そこで親達は、春松検校が

亡くなったのを機に独立して師匠の看板を掲げて一戸を構えさせ、二人を同棲させるという方法を取ったのである。春琴自身もこの程度ならあえて不服はなかったのであろう。

ただし大阪は今日でも、婚礼に家柄や資産や格式などを云々すること東京以上であり、元来町人の見識の高い土地であるから、封建の世の風習は思いやられる。したがって、旧家の令嬢としての誇りを捨てぬ春琴のような娘が、代々の家来筋に当たる佐助を低く見下したことは想像以上であったであろう。また、盲目のひがみもあって、人に弱みを見せまい、馬鹿にされまいとの負けじ魂も燃えていたであろう。とすれば、佐助をわが夫として迎えるなど全く己を侮辱

することだと考えたかもしれぬ。つまり、目下の人間と肉体の縁を結んだことを恥ずる心があり、反動的によそよそしくしたのであろう。しからば春琴の佐助を見ること生理的必要品以上に出でなかったであろうか。多分、意識的にはそうであったかと思われる。

てる

お師匠様は厠から出ていらしっても手をお洗いになったことがありませんでした。なぜなら用をお足しになるのにご自分の手はいっぺんもお使いにならんからです。何から何まで佐助どんがして上げました。入浴の時もそうでした。高貴の婦人は平気で体じゅうを人に洗わせて羞恥ということを知らぬといい

ますが、お師匠様も佐助どんに対しては高貴の婦人と選ぶ所はなかったのでござりましょう。それは盲目のせいもありましょうが、幼い時からそういう習慣に馴れていたので、今更何の感情も起らなかったのかも知れませんな。

佐助、畳を布で拭く

語り　「春琴居常潔癖（きょじょうけっぺき）にしていささかにても垢つきたるものをまとわず、肌着類は毎日取り替えて洗濯を命じたりき。また、朝夕に部屋の掃除を励行せしむること厳密を極め、坐するごとに一々指頭（しとう）をもって座布団畳等の表面をなで試み、

毫釐（ごうりん）の塵埃（じんあい）をも厭いたりき」

春琴、佐助に手を曳かれて登場。畳を撫でて確かめたり。

（食事）

語り　女で盲目で独身であれば、贅沢といっても限度があり、美衣美食をほしいままにしてもたかがしれている。しかし春琴の家には主一人に奉公人が五、六人も使われている。月々の生活費も生易しい額ではなかった。なぜそんなに金や人

手がかかったかというと、その第一の原因は小鳥道楽にあった。なかでも彼女はウグイスを愛した。

（化粧しながら）

ウグイスの声が聞こえる

春琴　今、鳴いたんは天鼓やな。

佐助　へい、今日は朝からよう鳴いております。

春琴　いつ聞いてもええ声やなあ。天鼓にだけは癒されるわ。

佐助　まったく、鳥の声とは思われません。

春琴　ほんまや。ええか、ウグイスいうたらホーホケキョウや思うとったらあかんで。そんなもん、そこらの藪ウグイスに鳴かせとったらええねん。天鼓はな、高音のホーキーベカコンいう、そのコンの響きが他のウグイスとは違うんや。まるで人工の極致を尽くした楽器のようやな。

佐助　まるでお師匠様の琴の音のようでござります。

春琴　なにお前まで、うまいこと鳴いてるねん。

佐助　すんまへん。

春琴　天鼓だけや、わての気持ちが分かるんわ。お前も少しは天鼓を見習うたらどうやねん。人間が鳥にも劣るとはなあ。ほんまに恥ずかしいこっちゃ。

佐助　へい、精進しますよって、どうか見捨てんといてやってください。

語り　奉公人は陰口をきいて、「お師匠様はウグイスやヒバリのほうがお前らより忠義ものだとおっしゃるが、忠義なのも無理がない。私らよりも鳥のほうがずっと大事にされている」と言った。春琴の家庭では彼女一人が大名のような生活をし、佐助以下の召使は極度の節約を強いられるため、爪に火をともすようにして暮らした。

また彼女は極端に贅沢を好む一面、極端にけちで欲張りであった。

あるとき盲人の弟子があり、家貧しきゆえに中元の付け届けに白仙羹（はくせんこう）を一折買ってきて情を佐助に訴えたことがあった。

爪を切りながら

佐助　何卒貧を憐れみ、お師匠様にお目こぼしを願いたくと申しておりましたが・・・

春琴

なあ、佐助。わてが月謝や付け届けをやかましく言うのを欲張りのように思うかもしれんが、そんな訳やない。銭金(ぜにかね)はどうでもよいが、大体の目安を定めておかなんだら師弟の礼儀いうもんが成り立たんやろ。あの子は毎月の謝礼でさえ怠り、今また白仙羹一折を中元いうて持参するとは師匠をないがしろにすると言われても仕方がなかろう。あの子は厚かましいだけが取柄で芸のほうはさして見込みがあろうとも思えん。貧を憐れんでくだされなどとはうぬぼれも甚だしい。なまじ人に迷惑をかけ恥をさらすより、もうこの道で立つことをふっつりあきらめたがよかろう。それでも習いたいのなら大阪には幾らもよい師匠がある。何処へなと勝手に弟子入りすればええやないか。私のところは今日限

りやめてもらいます。こっちから断ります・・・アホ、この爪、切りすぎや。

佐助　すんません。

とそこへ、玄関口のほうから人の気配

男　おい、誰かおらんのか

佐助　へい・・・だれでっしゃろ。ちょっとすんません。（佐助、玄関口へ行き）あの・・・なんぞ御用で・・・。

男　おまえ誰や。師匠はおらんのか。

佐助　わては師匠の代稽古をさせてもろうとるもんです。ご用やったらわてが伺いますが。

男　うちの娘な、お前んとこの女師匠に撥でどつかれて、顔の真ん中にえらい傷つけられたんや。

佐助　それは、すまんことでした。

男　すまんことでしたでは済まされへんで。なんぼ修行や言うて、年端もいかん子供をさいなむにも程があるわ。

佐助　せやけど、お師匠様も稽古熱心なもんで、つい・・・。

男　熱心にも程があるわ。あの子はな、芸者の卵やで。売り物の顔に傷つけよって。

もとの顔に戻してもらおうやないか。

佐助　それは・・・

春琴　（奥で聞いていた春琴出てきて）わてのところはな、躾が厳しいことで通ってます。それくらいで文句言うのやったら、なんで稽古に寄こしなさった。

男　なんやと、われ。いくら躾いうてもな、目の見えん奴のすることやないで。目くらは目くららしく、大人しくしとったらどないやねん、ええ！

佐助　まま、今日のところは、わてが気の済むまで謝りますさかい、どうか堪忍しておくれやす。

春琴　佐助、なにも謝ることはないで（と奥へ下がる）。

男　なにを、この目くら！

佐助　（小声で）あとでお預かりしている稽古代と、見舞金も持参いたしますので、今日のところは何卒ご勘弁を・・・。

男　（奥に向かって）おい目くら！これで世間が通る思うたら大間違いやで！（父親捨て台詞を残して去る。）

語り　春琴は真っ青になって震え上がり沈黙してしまったが、最後まで謝罪の言葉を吐かなかった。

七場

てる　お弟子さんはほんに少うござりましたが中にはお師匠さんのご器量が目あてで習いに来られるお人もござりました。素人衆は大概そんなのが多かったようでござります。

語り　ここに、土佐堀（とさぼり）の雑穀商（ざっこく）美濃屋（みのや）の悴（せがれ）で利太郎と云うぼんちがあった。なかなかの放蕩（ほうとう）者で遊芸（ゆうげい）自慢であったが、いつの頃よりか春琴の門に入って琴三味線を習っていた。親の身代（しんだい）を鼻にかけどこへ行っても若旦那（わかだんな）で通るのをよい事に

威張る癖があり同門の子弟を見下す風があったので春琴も心中面白くなかったけれども、そこは例の附け届けを十分にたっぷり薬を利かしてあるので断りもならず精々如才なく扱っていた。

利太郎　ま、さすがのお師匠さんも、己には一目置いている、言うことやな

語り　ある年の如月に梅見の宴を催し、春琴を招いたことがあった。総大将は若旦那の利太郎。それに幇間芸者らが加わり春琴には佐助が附き添って行った。その日一座に連なった者たちは、かねて聞き及んだ高名の女師匠を眼のあたりに

見、その艶姿(あですがた)と気韻(きいん)とに驚かぬ者なく口々に褒めそやした。

佐助は春琴を梅花の間に導いてそろりそろり歩かせる

佐助　ほれ、ここにも梅がござります。

語り　春琴のかぼそいしなやかな手が、曲がりくねった老梅の幹をしきりに撫(な)で廻す。およそ盲人は触覚をもって物の存在を確かめなければ得心しないものであるから、花木の眺めを賞するにもそんなふうにする習慣がついていたのである。

利太郎　ああ梅の樹が羨しいなあ

芸者　でも、あのお師匠さん、稽古は随分厳しい聞いてますよ

利太郎　これだから素人は困るわ。そこがええのや。盲目の美女に鞭打たれる快感・・・ま、俺は一番弟子やからな、叱られたことないけどな。ああ、ジャン・ジャック・ルーソーの気持ちが分かるわ

芸者　ジャン・ジャック？誰ですねん、その人。

利太郎　お前にはちいと難しかったな。また学があるところ見せてしもた。

芸者　ふん

芸者、春琴の前に立ちふさがって

芸者　わたい梅の樹だっせ

語り　春琴はいつも眼明きと同等に待遇（たいぐう）されることを欲し差別されるのを嫌ったので、こう云う冗談は何よりも癇（かん）に触った。

利太郎　お師匠はん、お師匠はんのお許しが出な佐助どん飲みやはれしまへん。今日は

梅見だっしゃないかいな。一日位ゆっくりさしたげなはれ。佐助どんがへたばったかて手曳きになりたがってる者がそこらに二人や三人いまんね。

春琴　まあまあ少しはようござります。余り酔わさんようにしてやって下され。

利太郎　さあ、お師匠はんのお許しが出ましたでえ。佐助どん、あんたも疲(つか)れはったやろ。お師匠はんはわいが預かる。あっちに支度(したく)したあるさかい、一杯やって来とくなはれ。

芸者　ささ、こちらに用意ができてますよ。

佐助　はあ…では、お言葉に甘えて…

芸者　まあ、お一つどうぞ

佐助　あ…いえ、あの…私はご飯をいただきますので

芸者　なに言うてますねん。お師匠さんのお許しも出たやないですか。遠慮なさらずに、さ、お一つぐいっと

佐助　はあ…

語り　銚子を持った芸者の一人がべったり着き切りで思いの外時間を潰したが、その間に座敷の方でどういうことがあったのか、

春琴　佐助を呼んでくだされ

利太郎　手水(ちょうず)ならばわいが附いて行ってあげますがな（と言って手を握る）

春琴　いえいえやはり佐助を呼んで下され。佐助、佐助。

利太郎の手を振(ふ)り払(はら)って立ちすくんでいる所へ佐助が駈(か)け付ける

佐助　帰りましょう。

語り　こんな事から出入りをしなくなってくれたら良い塩梅だと思っていたのに、色男を台無しにされては素直にあきらめきれなかったものか、明くる日からずう

ずうしくも平気で稽古にやって来た。ならば本気で叩き込んでやる。真剣の修業に堪えるなら堪えてみよと態度を改めてピシピシと教えた。

春琴　違う。チリガンチリガンチリガーチッテンや。もう一遍！

利太郎　お師匠さん、まあ今日はこの辺で・・・

春琴　あかん、もう一遍。

利太郎　（やる気なく）チリガンチリガンチーリチーリガーンガーン

春琴　やる気あるんか、この阿呆！

利太郎　あ痛

語り　撥(ばち)をもって打(ぶ)った弾みに眉間(みけん)の皮を破った。

利太郎　よくも男の眉間を割りよったな。覚えてなはれ。

語り　額から滴(こぼ)れる血を押(お)し拭(ぬぐ)い、憤然(ふんぜん)と座を立ち、それきり姿を見せなかった。

八場

語り　あるとき、佐助虫歯を病み、右の頬がおびただしく腫れ上がり、夜に入ってから苦痛耐えがたきほどであったのを強いてこらえて仕えていた。

春琴の肩を揉む佐助

春琴　アホ。いつまでそこ揉んでるねん。

佐助　すんません。

春琴　腰や。

佐助　へい。

春琴　足が冷たい。

佐助　へい。

かしこまって裾のほうに横臥し、懐を開いて彼女の足裏を胸板にのせる。歯痛がいよいよ激しくなるのにたまりかね、胸の代わりに腫れた頬を足裏へあてて、かろうじて凌いでいると、たちまち春琴がいやというほどその頬を蹴った。

佐助　あっ！

春琴　もう温めてくれぬでもよい。胸で温めよとは言うたが、顔で温めよとは言わなんだ。足の裏に目が付いてないのは目明きも盲人も変わりはない。なんでわて

を欺こうとするのや。お前が歯を病んでいるらしいことは、大方昼間の様子にても分かっておる。それほど苦しいのであれば、正直に言うたらよろしかろう。わらわとても召使をいたわる道を知らぬわけではない。いかにも忠義らしく装いながら、主人の身体を以って歯を冷やすとは大それた横着ものめ。その心底憎さも憎し、憎さも憎し、憎さも憎し、憎さも憎し・・・。

春琴、段々と自分を抑えられなくなっていく。

語り　もし春琴がいま少し人にへりくだることを知っていたなら大いにその名が知

れたであろうに、贅沢気ままに振舞ったために世間から敬遠され、その才の故にかえって四方に敵を作り、空しく埋もれ果てたのは、自業自得ではあるけれども、まことに不幸と言わねばならぬ。

春琴　わてを誰やと思うとるのや。わては大阪一の名手やで！

語り　されば春琴の門に入る者はかねてより彼女の実力に服し、この人をおいて他にはいない。修行のためにはどんな仕打ちも受けようという覚悟の上で来たのであったが、大抵は辛抱できなかった。

春琴　わてのところは稽古が厳しいことで通ってるのや。これぐらいで辛抱できひんのやったら、初めから来るな！

語り　思うに春琴の稽古振りが稽古の域を脱して意地の悪い折檻にまで発展し、嗜虐的色彩をまで帯びるに至ったのは、幾分か名人意識も手伝っていたのであろう。

春琴　目くらやいうて馬鹿にすな！

語り　それを世間も許し門弟も覚悟していたので、そうすればするほど名人になったような気がし、段々図に乗って、遂に自分を制しきれなくなったのである。

春琴　この阿呆め！この阿呆め！この阿呆め！この阿呆め！

暗転

春琴　ぎゃ～（絶叫）

九場

語り　今や、春琴の身に降りかかった第二の災難を序するに際し、伝にも明瞭な記載を避けてあるために、その原因や加害者を判然と指摘し得ないのが残念であるが、おそらく上記のごとき事情で、門弟の何者かに深刻な恨みを買い、その復讐を受けたと見るのが最も当たっているようである。

佐助はいつものように春琴の閨の次の間に眠っていたが、物音を聞いて目を覚ますと、有明行燈の灯が消えてい、真っ暗な中にうめき声がする。佐助は驚い

て跳び起き、先ず火を灯してその行燈を提げたまま屏風の向うに敷いてある春琴の寝床のほうへ行った。そして、ぼんやりした行燈の灯影（ほかげ）が屏風の金地に反射するおぼつかない明かりの中で部屋の様子を見廻したけれども何も取り散らした形跡はなかった。ただ春琴の枕元に鉄瓶が捨ててあり、春琴も寝床にあって静かに仰臥（ぎょうが）していたが、何故か云々と呻っている。佐助は最初春琴が夢にうなされているのだと思い

佐助　お師匠様どうなされました、お師匠様・・・

春琴　佐助、佐助、わてはあさましい姿にされたぞ。わては醜い姿にされたぞ。・・・

痛い・・・痛い・・・

佐助　お師匠様、お師匠様・・・

春琴　あかん、こっちに来てはあかん。見たらあかん。わての顔を見たらあかん。

佐助　お師匠様、お師匠様・・・（春琴の顔を見る）ああっ！・・・ご安心なされませ。お顔は見はいたしませぬ。この通り眼をつぶっております。（行燈の火を消す）

暗転　春琴に包帯巻く

語り

賊はあらかじめ台所に忍び込んで火を起こし湯を沸かした後、その鉄瓶を提げて寝床に忍び入り、鉄瓶の口を春琴の頭の上に傾けて、まともに熱湯を注ぎかけたのである。されば佐助は当夜枕元へ駆け付けた瞬間、焼け爛れた顔をひと目見たことは見たけれども正視するに堪えずして咄嗟(とっさ)に面(おもて)を背けたので、燈明(とうみょう)の灯(ひ)の揺らめく陰になにか人間離れのした怪しい幻影を見たかのような印象が残っているに過ぎず、その後は常に包帯の中から鼻の孔(あな)と口だけ出しているのを見たばかりであるという。

春琴

誰にもわての顔を見せてはならぬ。きっとこのことは内密にして。

佐助　なんのそれ程ご案じになることがござりましょう。火ぶくれの後が直りましたらやがてもとのお姿に戻られます。

春琴　これほどの大火傷に姿の変わらぬはずがあろうか。そのような気休めは聞きともない。それより顔を見ぬようにして。

語り　思うに、春琴が見られることを恐れたごとく、佐助も見ることを恐れたのであった。然るに、養生のかいあって負傷もおいおい快方に赴いたころ、

春琴　佐助、お前はこの顔を見たであろうの。

語り　突如春琴が思い余ったように尋ねた。

佐助　いえいえ、見てはならぬと仰ってでござりますものを、何でお言葉に違(たが)いましようぞ。

春琴　もう近いうちに傷が癒えたら包帯をのけねばならぬしお医者様も来ぬようになる。そうしたら他のものはともかく、お前にだけはこの顔を見られねばならぬ。見ないで・・・見ないで欲しい・・・。

語り　勝気な春琴も意地がくじけたか、ついぞないことに涙を流し包帯の上からしきりに両目を押し拭えば、佐助も暗然として言うべき言葉なく、共に嗚咽するばかりであった、が、

佐助　ようござります、必ずお顔を見ぬようにいたします、ご安心なさりませ。

語り　と、何事か期する所があるように言った。それより数日を過ぎ、春琴も床を離れ起きているようになり、いつ包帯を取り除けても差し支えない状態にまで治癒した時分、ある朝早く、佐助は女中部屋から下女の使う鏡台と縫い針とを密

かに持ってきて寝床の上に端座し、鏡を見ながら我が眼の中へ針を突き刺した。

〈途中から段々と、語りの言葉が佐助にのりうつっていく〉（**語り・佐助**）針を刺したら眼が見えぬようになるという知識があったわけではない。なるべく苦痛の少ない手軽な方法で盲目になろうと思い、（**佐助**）試みに針を以て左の黒目を突いてみた。黒目を狙って突き入れるのは難しいようだけれども白目の所は堅くて針が入らないが、黒目は柔らかい。二三度突くとうまい具合にずぶと二分ほど入った、と思ったらたちまち眼球が一面に白濁し、視力が失せていくのが分かった。出血も発熱もなかった。痛みもほとんど感じなかった。これは水晶体の組織を破ったので、外傷性の白内障を起こしたものと察せられる。

次に同じ方法を右の目に施し、瞬時にして両目をつぶした。

佐助が目を突くと同時に、春琴の瞳が開く。佐助、手探りで春琴のもとへ。

佐助　（額ずいて）お師匠様、私はめしいになりました。もう一生涯、お顔を見ることはございませぬ。

春琴　佐助、それは本当か・・・

春琴、しばらく黙って考えている様子。それは感謝の一念か、喜びに打ち震えている様なのか、それとも佐助の思いに心が打ち砕かれたのか。

語り

昔、悪七兵衛景清（あくしちびょうえかげきよ）は、頼朝の器量に感じて復讐の念を断じ、もはや再びこの人の姿を見まいと誓い、両眼をえぐり取とったと言う。それにしても春琴が彼に求めたものは斯くのごときことであったのか。彼女が涙を流して訴えたのは、私がこんな災難にあった以上、お前も盲目になって欲しいという意であったのか。そこまでは分からないけれども、佐助、それは本当かと言った短い一語が、佐助の耳には喜びに震えているように聞こえた。そして、無言で相対しつつあ

る間に盲人のみが持つ第六感の働きが佐助の官能に芽生えてきて、ただ感謝の一念よりほか何物もない春琴の胸のうちを自ずと会得することができた。今まで肉体の交渉はありながら、師弟の差別に隔てられていた心と心とが始めてひしと抱き合い、ひとつに流れて行くのを感じた。押入れの中の暗黒世界で三味線の稽古をしたときの記憶が蘇ってきたが、それとは全然心持が違った。およそ大概な盲人は光の方向感だけは持っている。ゆえに盲人の視野はほの明るいもので暗黒世界ではないのである。もう衰えた彼の視力では、部屋の様子も春琴の姿もはっきり見分けられなかったが、包帯で包んだ顔の所在だけが、ぼうっとほの白く網膜に映じた。彼にはそれが包帯とは思えなかった。ついふた月

前までのお師匠様の円満微妙な色白の顔が、鈍い明かりの圏の中に、来迎仏のごとく浮かんだ。

春琴　（佐助の顔に手を伸べて）佐助、痛くはなかったか。

佐助　いいえ、痛いことはございませんでした。お師匠様の大難に比べましたら、これしきのことがなんでございましょう。あの晩曲者が忍び入り辛き目をおさせ申したのを知らずに眠っておりましたのは、返す返すも私の不調法。毎夜、お次の間に寝させていただくのはこういうときの用心でございますのに、このよう

な大事を惹き起こしお師匠様を苦しめて自分が無事でおりましては何としても心が済まず罰が当たってくれたらよいと存じまして、何卒わたくしにも災難をお授けくださりませ。こうしていては申し訳の道が立ちませぬと御霊様（ごりょうさま）に祈願をかけ、朝夕拝んでおりました甲斐があって、ありがたや望みが叶い、今朝起きましたらこの通り両目が潰れておりました。定めし神様も私の志を憐れみ願いを聞き届けてくだすったのでございましょう。お師匠様、お師匠様、私にはお師匠様のお変わりなされたお姿は見えませぬ。今も見えておりますのは、三十年来眼の底に沁みついたあのなつかしいお顔ばかりでございます。何卒今まで通りお心置きのうお側に使ってくださりませ。俄盲目（にわかめくら）の悲しさには立ち

居も儘ならず御用を勤めますのにもたどたどしうございましょうが、せめてお身の周りのお世話だけは人手を借りとうございませぬ。

春琴　よくも決心してくれました。嬉しう思うぞえ。わては誰の恨みを受けてこのような目に遭うたのか知れぬが、本当の心を打ち明けるなら、今の姿を他の人には見られても、お前にだけは見られとうない。それを、それをようこそ察してくれました。

佐助　あ、ありがとうございます。そのお言葉をうかがいました嬉しさは、両目を失うたぐらいにはかえられませぬ。お師匠様や私を悲嘆に暮れさせ、不仕合せな目に遭わせようとした奴は何処の何者か存じませぬが、お師匠様のお顔を変え

て私を困らしてやるというなら、私はそれを見ないばかりでございます。私さえ目しいになりましたらお師匠様のご災難は無かったのも同然、せっかくの悪だくみも水の泡になり、定めし其奴は案に思い違いをしていることでございましょう。ほんにわたくしは不仕合せどころかこの上もなく仕合せでございます。卑怯な奴の裏を掻き鼻をあかしてやったかと思えば胸がすくようでございます。

春琴　佐助、もう何もいやんな。

語り　盲人の師弟、相擁して泣いた。

佐助、うしろから春琴を抱きしめる。まるで二つに重なり合って三味線を弾いているように。力強く。

佐助　ああ、これが本当にお師匠様の住んでいらっしゃる世界なのだ。これで、これでようよう、お師匠様と同じ世界に住むことができた・・・。

ゆっくり暗転

十場

語り

春琴は明治十九年六月上旬より病気になったが、病む数日前、佐助と二人、中前栽（なかせんざい）におり、愛玩の雲雀（ひばり）の籠を開けて空へ放った。見ていると、盲人の師弟、手を取り合って空を仰ぎ遙かに遠く雲雀の声が落ちてくるのを聞いていた。雲雀はしきりに啼きながら高く高く雲間へ入り、いつまでたっても降りてこない。あまり長いので二人とも気を揉み、一時間以上も待ってみたが、遂に籠に戻らなかった。春琴はこのときから怏々（おうおう）として楽しまず、間もなく脚気に罹り、秋になってから重態に陥り、十月十四日、心臓麻痺で長逝（ちょうせい）した。春琴の死後、

佐助が語って言うのに、

佐助　誰しも目がつぶれることは不幸せだと思うであろうが、自分は盲目になってからそういう感情を味わったことがない。むしろ反対に、この世が極楽浄土にでもなったように思われ、お師匠様とただ二人、生きながら蓮（はす）の台（うてな）の上に住んでいるような心地がしたものじゃ。それというのも、目がつぶれると目明きのときに見えなかったいろいろのものが見えてくる。お師匠様のお顔なぞも、その美しさがしみじみと見えてきたのは、目しいになってからじゃ。そのほか、手足の柔らかさ、肌のつやつやしさ、お声の綺麗さも本当によく分かるように

なり、目明きの時にこんなにまでと感じなかったのがどうしてだろうかと不思議に思う。とりわけ自分はお師匠様の三味線の妙音を失明の後に始めて味わった。いつもお師匠様は師道の天才であられると口では言っておったが、ようやくその真価がわかり、自分の技量の未熟さに比べてあまりにも隔たりがありすぎるのに驚き、今までそれを悟らなかったのは、なんという勿体ないことかと自分の愚かさが省みられたものじゃ。されば自分は神様から目明きにしてやると言われてもお断りしたであろう。お師匠様も自分も盲目なればこそ、目明きの知らない幸せを味わえたのじゃ。

一旦暗転し、その後明転すると、春琴と佐助が並んで座っている。それは、静かに佇む二基の墓のようでもあり、また、春琴が弦をもてあそんでいる傍らで、佐助が恍惚としてうなじをたれ、一心に耳を傾けているようにも見える。

語り　人は記憶を失わぬ限り故人を夢に見ることができるが、生きている相手を夢でのみ見ていた佐助のような場合には、いつ死に別れたともはっきりした時は指せないかも知れない。

かくて佐助は晩年に及び、妻も子もなく、門弟達に看護されつつ、明治四十年十月十四日、春琴の祥月命日に、八十三歳という高齢で死んだ。察するところ

二十一年も孤独で生きていた間に在りし日の春琴とは全く違った春琴を作り上げ、いよいよ鮮やかにその姿を見ていたであろう。佐助が自ら目を突いた話を天竜寺の峩山和尚が聞いて、「転瞬の間に内外を断じ醜を美に回した禅機を賞し、達人の所為に庶幾し」と言ったというが、皆様はいかがお思いだろうか。

完